

第18回 日能研

文学コンクール

奨励賞

【創作文】 自傷の嘘付き

青山学院横浜英和中学校・三年

早川 結菜さん

作品に対する思い・感想

この度は、奨励賞に選んでいただき誠にありがとうございます。
ます。

この作品「自傷の嘘付き」は、心が優しいゆえに、一番大切なことを忘れてしまった女の子が、出会いをきっかけに変わっていくという話です。

思春期の難しい心を通して見る、日常に潜む大切なものが表現出来ていれば良いなと思います。

どうも謝る癖がついてしまった。

それに気づいたのは、なんとなく過去を反芻していた時だったか、友達と話していてふとそう指摘された時だったか。心当たりはあるものの、詳しくは覚えていない。それを悪いことだと思った事がない故に、昔からその癖は自分を特徴づける一つとして、心の奥深くに根を伸ばしていた。

「おい、聞いているのか。真美」

「…あっうん。ごめんなさい」

これは夏の初め。初夏のこと。ジリジリと照りつける太陽が外気温を大きく上げていくのに対し、エアコンの効き過ぎからか、ここ室内はこれでもかという程冷え切っていた。

「で？お前親に対して何なんだ？その態度は」

「…ごめんなさい」

ああほら、また謝った。他人事のようにそう思う。当事者がこの態度とは宜しくない、と分かってはいても、特にこれといった感情が浮かばないのだから仕方ない。真美は、チラと不機嫌丸出しで腕組する父親に視線を移す。縁無しレンズから覗く冷ややかな目に、思わず苦笑いが溢れた。

大したことじゃない。今回のお説教は、自分に非があったからだ。と言っても毎回そうなのだが、大人である親がそう言っているのだから間違いないだろう。こちらに非があるというそれは正しい。

「…私が悪かったよ。ちょっと最近色々あって、イラついちゃってて…あんまり話す気がなかったの。だから無視したみたいになっちゃって。ごめんなさい」

反省している。

それは本当なのに、真美はグッと奥歯を噛みしめた。

気持ち悪い。

心の奥からモヤモヤとした何かが湧き上がって来るような感覚がした。

心が黒い絵の具と混ぜられてぐちゃぐちゃになっていく。

くるしい

その一言は言わせない、と喉がなにかに締め付けられた。

でもそれに対して、この言葉はスルッと喉を通る。

「…ごめんなさい、気を悪くさせて。次はちゃんと気をつけるね」

いつもこうだ。

いつも謝るとこうになってしまう。

自分が悪いという事実を否定するみたいに、心の奥底がうごめき出す。

自分の非を受け入れられないなんて、まるで反抗期の子供だ。

自分に100%非があるという状況下で、自分は悪くない！と親に抗議するなんて非道理にも程がある。

14歳にしては達者な考えを盾にして、真美は唇を噛んだ。

わがままな子供。

なによりも、何度も親を怒らせてしまう身勝手な自分が嫌いで仕方ない。

大人になったその時には、この自分は変わっているのだろうか。

やるせない気持ちを消化するように真美は拳を握りしめる。

「…おい、真美—」

pirrrr pirrrr

明らかに場違いの軽快な音とバイブレーションがリビングに響いた。

「チッ…今来るか」

机に置かれたスマホを忌々しげに取る父親を見て、真美はそれ以上言葉が紡がれなかったことに少しほっとした。

自己防衛だ。自分の非は認めたし次が起こらないようにと約束もしたから、もう何も言わないで、とってしまった。

5コール目が鳴った。

真美は、未だ鳴り続けるスマホの画面と自分の方を何度も見比べては顔を顰める父親から視線を外す。セミロングの茶髪が、はらりと落ちてきた。…仕事の電話なら早く出ればいいのに。

少し間が空いて、ガタッと椅子と床が擦れ合う音がした。

「真美、ここで待ってろよ。話は終わってないからな」

「…」

吐かれた捨て台詞のようなものと、扉のガチャンと閉まる音が重なって響いた。しーんという、何もないことを証明する音がこの場いっぱいに満たされて飽和する。

さっきの言葉に最後、返事をしなかったのは反抗からだろうか。モヤモヤが膨れる。

ああ嫌だ。これだから—

「…分かってるもん」

外からの光がやけに眩しく感じて、うつむいていた顔を上げ目を細める。一瞬視界が歪んだ。

真美は煩わしく思いながら指で目元を拭う。

自己嫌悪。

いっそ塩辛い味のするそれが、キラリと光を反射した。

「弱虫」

鼻をすすった。

類は友を呼ぶとはまさにこれだ。頭の中がどんどん昔の嫌な記憶で埋まっていく。悔しい、悲しい、気持ち悪い、苦しい、嫌い。

「ぐすっ…」

白昼夢を見るように、流れ込んできたその時の光景、感情がすべて今と結びついて大きな不へと膨れた。

…どうしていつも。

涙が止まらなくなった。

歪んで見える世界がとても歪で不恰好に見える。

それなら、もういっそ無くなって。

無くなって、全部消えて。

跡形もなく。

嫌いなの。失くなって。

泣くなってッ。

わがまま。

わがまま。

本当にわがまま。

「弱虫…大っ嫌いッ…！！」

溢れ出て終わりを知らないそれを止めようと、蓋をするように顔を覆う。

いい子賢い子なんて、そんな見上げたものは真似できない。
建前さえも言うことができないのだから。
あまりの惨めさに失望する。

取り繕うのが苦手だ。
だから積もり積もったそれにほんの少し、少しだけ、今耐えられなくなってしまう。
押しつぶされて、悲鳴を上げるそれらが幼く泣き声を上げる。

—どこかへ行って

今だけはせめて許してほしい。
今だけはわがままと言われたっていいから。
だから今だけは—

真美はそれに駆られて、駆け出した。
さっきとは180° 違う強い日差しと生暖かい風が身体を包む。

焦ったような自分を呼び止める声ももう聞こえなかった。

移り変わる景色。

横断歩道、公園、道路、高いビル。それに行き交う通行人。

同じような景色を何度も繰り返した。

真美は荒い呼吸に捕らわれることなく走り続ける。すれ違った人から寄りこされる視線にも気付かないくらい、それはもうがむしゃらに。

自分を突き動かす感情が消えて無くなるまで、忙しなく動く心が落ち着くまで、このままでいたい、と思った。

「はあ…はあ…」

とはいえ、猛暑とまではいかないが暑さでどうにかなりそうだ。

上り坂というのも余計に気を参らせる。

だらしなく反動で動いているだけの腕がとっくに崩れたフォームを物語っていた。

止まってしまいたい、と思った。

でも、まだ立ち止まれない。

真美はぐっと歯を食いしばって、足を前へ前へと動かす。

ミーンミンミンミーン

間延びしたセミの鳴き声が聞こえる。

アスファルトの温度が下がる気配はない。

道が、どこまでも続いているような気がした。

…ほんとうにこの気持ちは晴れるのだろうか。

ゴールがいつまで経っても見えて来なくて、唐突に不安になる。

急にぷつんと途切れてしまった。

集中力が切れた時と同じ感覚。一気に周りの家の形と色、空の濃度、雲の形、疲労に足の痛みが意識下に入ってくる。

「あ…」

しまった、と思った。

足がもつれた。

スローモーションのようにゆっくりと、ゴツゴツとした地面が目の前に迫る。

これはきっと痛い。

そう分かったのに、一步出遅れた。

ドサ、と派手な音を立てて真美は転ぶ。

「…痛っ」

転んだのなんて何年ぶりだろうか。

じわじわと鈍い痛みに膝を見ると、血が滲んでいた。

このくらいでは流石に泣かないが、急に止まったこともあって、心臓がバクバクとうるさいほどの音を立てる。

あんなこと考えなければよかった。

真美が痛みにも耐えながらも立ち上がりかけた、その時だった。

「あらあら、あらまあ…大丈夫？」

聞き心地の良い落ち着いた声と、こちらへ来ているのだろう下駄の音が真美の動きを止めた。

「転んでしまったのね。こっちへいらっしゃい。手当してあげる」

古びた家屋が優しげな駄菓子屋だった。

そこから出てきた70代ほどのおばあさんが、にこりと微笑む。

ふわりと薄黄色の浴衣が揺れた。

「…え、」

「いいのよ、遠慮しなくて」

戸惑う真美に、おばあさんは「そこに座って」と駄菓子屋前の丸椅子を指さした。

「待っててね、今絆創膏を持って来るから」

そう言い残しておばあさんは店の奥の方へと姿を消す。

リンッ

開け放たれた扉に結わえ付けられた水色の風鈴が涼しげな音を立てた。

「…どうしょ」

真美は予想もしていなかった展開に困惑する。

こんな事になるなら意地でも走ればよかった、と真美は若干後悔した。無理な話ではあるが、疲労から目を背けようとして回りだした頭が悪いのだ。

おばあさんの善意が少しだけ面倒に感じてしまい、真美はそこに行くのを躊躇する。しかし、このまま立ち去るわけにも行かない為、結果として真美は和菓子屋前のその椅子にちょこと腰掛けた。

周りに瓦屋根の家が多い。

その中には現代らしく洒落ている色もあり、通りでこのお店が目立たなかったわけだ、と真美は一人納得する。

ずいぶん遠くまで来てしまったようだ。

走った距離からも考えて、ここは隣町だろうか。

「いいところでしょう？港に近いの。海風が涼しいわね」

奥から戻ってきたおばあさんはそう言って真美の隣の丸椅子に座り、嬉しそうに微笑んだ。その腕には絆創膏や消毒液が入っているであろう救急箱が抱えられている。

「ほら、見せて。簡単な処置しかできないけれど」

「わざわざすみません…ありがとうございます」

おばあさんの方に体を向ける。
消毒液の匂いが辺りに漂った。

「いいのよ。お礼が言えて偉いわね」

「…はい」

上がった呼吸がなりを潜めた代わりに、また嫌な気持ちが胸に溢れ出し始めた。ああ通りでゴールが見つからなかったわけだ。
きっとこれは何度も繰り返す続ける。
今まではこんなことなかったのに随分と弱くなったな、と唇を噛み締めた。

「ねえ」

消毒液が傷口を刺激する。甲高いような痛みがした。

「後ろ。もう見たかしら？」

「え？」

おばあさんは店の中に視線を移す。
それにつられて、真美も後ろを見た。

「わあ…」

思わず感嘆が漏れた。

ピンク、水色、緑、黄色、紫。

キラキラと光を反射する宝石のようなお菓子がそこにはあった。

比喩ではない。

この駄菓子屋は珍しく、飴や水飴、金平糖などのお菓子が店の商品のほとんどを占めていた。

真美は小道に建つ家の小さなイルミネーションを見つけたような、そんな温かな気持ちになって自然と頬を緩める。

「気に入ってもらえたかしら？」

「はい…すごくきれいですね」

「ふふ、ならよかった」

真美の膝に最後、少し大きめの絆創膏が貼られた。

「はい、お終い。早く良くなると良いわね」

「あっ、ありがとうございます」

「ふふっいいのよ」

あまりの綺麗さと可愛さに夢中になって見ていた真美は慌ててお礼を言う。おばあさんにはにここと人好きされそうな笑みを浮かべて、店の看板部分を指した。

「ここね、もう見たかしら？『みなはや店』って言うの。地元じゃちょっと有名な駄菓子屋。あなたは多分だけれど、ここの近くに住んでいないわよね」

「え？はい」

「ここはみんなのお店なの。いらっしゃい、お客さま。道が繋がっていてよかったわ」

「は、はあ…」

道？ どういうことだろう。

「ちょっと待っててね」

そう言い残しておばあさんはまた店の中へと入って行き、今度は手に2本のラムネを持って帰って来た。

「これあげる」

そのうちの一つを真美に差し出し、おばあさんは微笑んだ。

「えっそんな、大丈夫です！私今お金持っていないし…」

「あらいいのよ？これは私からあなたへのプレゼント」

真美の手にラムネが半ば無理やりねじ込まれる。
キーンと冷たいそれは透き通るような水色をしていた。

「せっかくの出会いだもの。少しお話しましょ」

「いやでも、そんな…」

「じゃあこう言えば聞いてくれるかしら。お客さまが来ないときはひとりで寂しいの。このおばあちゃんの話し相手になってくれる？」

ぐっ…と言葉に詰まる。

この何も解決できていない状態のまま帰るのは癪なため、話をすること自体は別に構わないのだが、物を貰うとなると気が引けてしまう。せめて100円ぐらいは持ってくればよかったと真美は後悔した。

受け取らないで話だけするという手もあるにはあるが、その善意と期待を裏切る術を真美は知らなかった。

「…ありがとうございます、いただきます」

真美の百面相を面白そうに見つめていたおばあさんは、その嬉しそうだが渋々という表情にクスリと笑う。

「そうそう、子供はそのくらい素直がいいわよ」

プシュッという空気の逃げ出す音の後、カランという涼しげな音がした。

「あなた、お名前は？私は桜井千恵」

「千恵さん…きれいなお名前ですね。私は、麻木真美です。中2です」

「真美ちゃんね。そう、中学2年生なの。大人っぽいわねえ、もう少し上かと思った」

「…そうですか？」

真美は少し反応に困り、首を傾げる。
どこをどう見ればそう思うのだろうか。
どちらかと言えば幼い顔つきをしている自負がある。

「そうねえ…なんだか難しい事をたくさん考えてそう。だから大人っぽく見えたのかしら」

「難しいこと…？」

「ええ。さっき私がそれをあげたとき、何を考えていたの？」

「別にそんな難しい事考えてませんけど…」

まだ減っていないラムネの中でビー玉が転がる。

「いいから、いいから」

「…お店側の損失か善意か、どっちを取ったらいいのか考えていただけます…」

言って何になるのだろうか。

「ほら、難しいことじゃない」

やっぱりね、と眉を上げる千恵に真美は肩を竦める。

「そんなに深く悩む必要なんてないのよ。世界なんてとっても単純なんだから」

「そうですか？」

「ええ。辛くなってしまうわ、そんな考えているとね」

「…」

確かに凶星だった。

昔から人の心に敏感なために何かと苦労してきたから。

もしこう言ったらどう思うんだろう。ああ言ったらダメだな。

そうやっていつも難しく考えてしまう。

でもその中で、人の感情の基盤は喜怒哀楽。感情は全てそれらが上手く組み合わせられてできているから、実はその法則に則って読み取れば人の気持ちは簡単で、少し機械じみているなど思ってしまう自分もいる。

何が正しいのか、いつも分からなかった。

いつも自分を泣かせるあの子たちは、本当は全部自分が悪いわけではないと反論したいようだし、少し大人の方の感情は自分が全部悪いと責めてくるから。

「…千恵さんは、何が正しいのか分かりますか」

ふと聞いてみたくなった。

旅の恥はかき捨て、と言ったところだろうか。

どうせひとりじゃ何も得ずに帰ることしかできないだろうから。

「何が正しいのか…そうね、難しい質問だわ」

真美は何となく気まずく思って、初めてラムネを口にする。

優しい甘さが口の中に広がった。

「一例だけれど、戦国時代の時は人を殺してしまうって普通だったでしょう？それと同じで、正しいものも変わるわよね。

曲がり曲がったものも遠くから見れば真っ直ぐな線に見える…とよく言うけれど、その定義自体が人間の創作物だもの。道徳とかもそうよ。

…この世の中に正しいものなんて、本当はないんじゃないかしら」

「正しいものなんてない、ですか…」

「真美ちゃんはどう思うの？」

「私は…」

聞いておいてあれだが、あまり深く考えたことがなかった。

でも、その意見をとても面白い考えだなと思う反面、何となく違うように感じるのは自分の意見を持っているからだろう。

考えを巡らせた末、思った。

強いて言うのなら、今の社会が正しいものなのではないか、と。

ここに自分の戸籍があって、ここに居場所がある。
それはある意味、その存在証明のためにこの社会に遵従する契約を結んだという意味になる…のではないだろうか。
正しい、道徳的、という言葉が人間によるものなら、それに当てはまる事実も人間によって創られたものではないと当てはまらない。
だから、正しいとはそれを創った社会のことなのではないか。
可能性を作ったところで、結局人はこの社会から逃げられやしないのだから。

「…なるほどね」

そう話すと、千恵は優しく微笑んだ。

「とてもよく考えているのね。とっても面白いわ、その意見」

だから…と千恵は言葉を繋げる。

「少し質問してもいいかしら？」

「え？」

真美はきょとんとした顔をする。

「ねえ真美ちゃん、大人ってなんだと思う？」

「大人？」

さっきの話に繋がるのだろうか。

「大人は大人、ですよ？他に何が…」

「じゃあ質問を変えるわね。どこからが大人だと思う？」

「どこから…？」

法律上は18歳からだ。

でもそういう話ではないことは察せられる。

大人…子供とは対照の存在？

どこで子供が終わるのかということだろうか？

「…分らないです」

「ふふ、まだ難しいわね。じゃあ大人になったら…そうね18歳になったら、急に心が大人になると思う？」

「…」

そもそも大人とは何なのか分からなくなってしまった。

どういう定義でそう呼ばれているのだろうか。

「…でも、急に変わることはないと思います。18歳になっても、その人からしたらいつもと同じ1日として変わらないから。だから子供のうちに少しずつ変わって行って、大人になるんじゃないんですか？」

「そうね。でもその子供のうちに少しずつ成長して、ぴったり18年目で立派な大人になるための成長は終わると思うかしら？」

「ぴったりは…ないですかね。その前の日まではまだ大人になるために成長していたし、たったの18年間で立派な大人になれるとも思えませんし…」

—あつ。

もしかしたらそういうことかも知れない。

「立派な大人になるためにずっと模索し続けて成長し続けて…だから本当の大人がどこから始まるのかっていう範囲はないってことですか？」

「ふふっ案外そうかも知れないわね。大人というのは人生の目標であって存在はしないのかも」

千恵はにこっと真美に笑みを向ける。

「でもね。なぜ子供と対になる大人という言葉が生まれたのか、と言われれば、それは人が大人になったからなんでしょうね」

「…どういうことですか？」

言っていることが矛盾している。

「心が大人になって余裕が生まれて、自分のためだけでなく他の誰かのためにも行動できるようになったのよ。昔から大人は子供を守って生きてきたでしょう？それと同じね。みんな大人になっていくの」

「…難しいですね」

あと少しで理解できるようなもどかしさに足を動かす。ジャリ…と小石が音を立てた。

「ねえ真美ちゃん。社会って誰が創り上げていると思う？」

千恵はまた真美に問う。

でもそれは決して詰問の類ではなく、純粋な問いのような、あるいは優しく諭すように相手に問いかけるもの。

何となく手慣れているように感じるのは、年の功によるものだろうか。

「社会を創っている人って…主に大人ですよ？」

「そうね。もちろん子供もだけれど、形にしているのは大人たちだわ。その大人たちは今もずっと成長し続けているの」

「…」

千恵はそんな真美に諭すように言う。

「完璧な人はこの世にひとりもないのよ。だから、“正しい”が本当にこの世界にあるのかは分からないけれど、世界が全て正しいわけではないんじゃないかしら。ちゃんと自分の目で正しいものを見つけて、自分を押し殺さないようにして…大切にできたのなら…」

その綺麗な黒色の瞳に、苦しそうで今すぐ消えてしまいそうな表情をする少女が映る。

「あなたは少しは救われるのかしらね」

それが自分だと分かって、真美は思わず口に手を当てた。

そして、ああ通りで…と全てに納得する。

その何も言わない優しさが、ただ心に染みた。

それを貶してしまいたくなかったから、敢えてその事には触れないで、真美は不器用にはにかむ。

「…そうですね」

千恵はそれにうなずいて、真美からカラになったラムネ瓶を受け取る。もう“お話し”はお終いという合図のようだった。

真美はちゃんとその意図を理解して、椅子から立ち上がる。

「千恵さん。“ラムネ”ありがとうございました」

もう少し話したい事があった。

でもきっと全てを教えてはくれない。

年季を感じる『みなや店』という字を振り返りざまに見て、この出会いは偶然ではなかったのかもしれない、なんて事を考えた。

「また来ます」

あの心のモヤが、今なら分かる気がした。
どうして泣いているのか。どうして何度も繰り返すのか。
だから『なやみ』を一緒に考えてくれたその人にそれがちゃんと伝わる
よう、目をしっかりと合わせてそう言う。
ここに来てよかった。

「またおいで」

千恵はそんな真美を見て、最初会った時のように優しく微笑んだ。

夕日の赤い光に照らされた街が輪郭を黒くする。
今なら見える気がした。
真美はまた痛み始めてきた膝を物ともせず、斜面を駆け上がる。

ずっと嫌いだった。

ただでさえ何もできないのに、相手を怒らせる事だけはなぜか得意な自分のことが。反省しているのに反発しようとする心も、ちぐはぐだが、それは本心で。本当にたちが悪い。

自己嫌悪の末、だから耳を塞いだ。
他にどうすればいいのか分からなかったから。
自分を押し殺すことに相違ないそれは、自分で自分の首を絞めているようだった。徐々に感覚は麻痺していき、“苦しい”がなんなのかも少しずつ分からなくなっていく。
でもそんな時は必ず、幼い子たちがやめてと泣いてくれた。
せめていい子になりたかった…なんて。
本当にまだ子供なのは誰なのだろうか。

「…着いた」

真美は肩で息を消化しながら、そこに足を踏み入れる。
小さな山の展望台だった。
新緑が夕日を受けて相反色を成り立たせる。

真美はそこに立って、夜に浸かり始めた街を一望した。
夕日の赤の中に、信号機、車のライト、家の灯り…色々な光が混在して一つの海のようにも見えるが、今はその一つ一つがちゃんと“個”として目に入ってくる。

「綺麗…」

人間が創り上げた創作物。

自然を改良してできたというそれは、誰がなんと言おうと、人が生きてきた証だった。

そして、完璧ではない人間が創り上げたそれは遠目に見ればただの風景だけれど、間違いなく物語があって、決して滑稽などではない。

改めてあの人との出会いに感謝した。

あの後、来た道を引き返してしまえば、そこにあるのはもういつもの見慣れた景色で、ひとりじゃ遠くにも行けないと思い知らされた。

でもそれで良いのだ。

人はひとりじゃ生きられないから、周りとは協力して生きていく。

それで更に、人を愛せたならもっといい。

それを教えてくれた。

自分は「わがまま」という言葉を盾にして、いつも話し合うことから逃げていたと。

辛かったのは自分が追い込んでいたからで、人と分かり合うことを諦めたのは甘えてしまっていたから。

本当に今までのやり方は正しかったのだろうか。

いや、何が自分と相手のためになったのだろうか。

世界を中心として考えるとあまりに人は難しい。

この異様なまでに広い世界のほんの小さな感情になんて、誰も気付きやしないから。でも、それを見ているのは宇宙ではなく自分だ。

自分に嘘を付かないで

自分を好きになって

人と向き合って。

太陽が沈みかけた時、その最後に放った光があのお店で見た飴玉と重なった。

もう一生、この美しさを忘れないようにしよう。

そう心に刻み込んで、真美は道を振り返る。

「傷つけてごめんね」

温かい。

心のもやが雲になって、優しく心を包み込んだ。